**２０２０年度　入門講座**9月20日（日）

**第十二課　「サマリアの女」**

**生きている命の水**（ヨハネ；4：1－30）

この聖書はその女の名をついに最後まで記していない。名前を記すほどの価値がある人間でもない、ということでもないであろう。実際、家名称号がどれだけその人の内実を表すことができるというのだろうか。歴史に名を残すために大火事（エフェゾのアルテミスの神殿）を起こしたという男性（へロストラトス）の名が残っているが、歴史に名を残すことがどれだけ本当に大事なことなのか？人生には、「何をしたか」という問い以上に、「どう生きたか」という問いがある。聖書「むしろ、あなた方の名が天に記されていることを喜びなさい。」「あなた方のいのちは、キリストと共に神のうちに隠されている」ヨハネは、この名もなき女のためにほとんど一章の全部を費やしている。

Ⅰ背景

1. 民族間の「壁」

サマリアはBC10世紀、イスラエル王国が分裂した時、北王国の中心になった地方である。この地方はヤコブの子どもヨゼフの流れを汲んでいる人たちによって支配された。エルサレムを中心とする南のユダ王国と対立し、ゲリジム山に独自の聖所を持ち、信仰的にも民族的にも分かれてしまった。そこに民族間の「壁」が生じ、憎悪と差別を互いに投げつけるような激しい対立が続いていた。

1. 男女の間の「壁」

当時の社会では、男性と女性は対等な人間同士として関わることはできないと考えられていた。道端で男性が見知らぬ女性に声をかけ、立ち話をするということは考えられなかった。イエスはどのようにこの壁を乗り越えていったのであろうか。

**Ⅱ　主イエスと女の、命の水をめぐる対話**

**「サマリアの女」**　（ヨハネ；4：1－30）

主イエスはそれまで弟子たちに洗礼を授けさせておられた。これ以上ヨハネに迷惑をかけてはならないと思われたのか、洗礼者ヨハネと共におられたユダヤ地方を立ち去りガリラヤに戻られた。途中サマリアを通らねばならなかった。敵意の中を歩まねばならなかった。正午ごろだから空腹、疲れた主イエスを残し、弟子たちはシカルの町に食べ物を買いに行った。その間の出来事である。

さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、・・・洗礼を授けていたのは、イエスご自身ではなく弟子たちである。・・・ユダヤを去り、ふたたびガリラヤに行かれた。しかし、サマリアを通らねばならなかった。それで、ヤコブがその子ヨゼフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

サマリアの女が水を汲みに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか。」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っておりまた、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」女は言った。「主よ、あなたは汲むものもお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸を私たちに与え、彼自身も、子どもや家畜も。この井戸から水を飲んだのです。イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、私の与える水を飲むものは決して乾かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠のいのちに至る水がわき出る。」女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

イエスは、「行って、あなたの夫をここに呼んできなさい」と言われると、女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫がいません』とはまさにそのとおりだ。あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあるといっています。」イエスは言われた。「婦人よ、私を信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもないところで、父を礼拝する時が来る。あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られるとき、私たちに一切のことを教えてくださいます。」イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

ちょうどそのころ、弟子たちが帰ってきて、イエスが女と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。女は水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

シカルと言う町から１キロ半離れた所にヤコブの井戸がある。旅に疲れたイエスはサマリアの女に水を飲ませてくれと頼んだ。イエスが人間にものを頼むのは珍しいことである。女はシカルの町の住民、１キロ半歩いて水を汲みに来る。この女は６人の男と同棲しており、サマリアの仲間たちからふしだらな女として敬遠されていた。だから本来なら朝早く水を汲む井戸に、人影の絶えた昼ごろ水を汲みに来たのだろう。人々に蔑まれていようが憎まれていようが、水を汲みに来なければ生きていけない。井戸に来ると見知らぬ男が疲れ切った様子で座っている。イエスは真昼の炎天下で汗をかいていただろう。女の年齢も顔だちも分からない。

イエスは、ただサマリアの女にきわめて無造作に「水を飲ませてほしい」と言った。女は驚いた違いない。あなたはユダヤ人、私はサマリア人で、しかも女。なぜ私に頼むのですか？ここから話が不思議な展開をする。何故と問われて、もしあなたが神の賜物を知っていたなら、生きた水を与えたことだろう、と応えるイエス。水を飲ませてほしいと頼んでいる私が、あなたに水を飲ませることがという。しかも「私の与える水は肉体を生き返らせる水より霊の命をとこしえに生かす水、しかもこの水を与えられた人は自分が泉となることができる。これが神の賜物である命の水」であるという。女を招くみ言葉に続いて話は中心に入る。女はここでこの方がだれであるかわかりかけているように、「**主よ**」と呼ぶ。続いて女の信仰の告白「主よ、もう渇くことのないように、汲みに来なくていいようにその水を下さい」と。生きた水とは生き生きと目の前で迸り出てくる新鮮な水で、乾いた喉を潤す水。女は命をよみがえらせる生きた水の話だと思ったようである。女は、自分のことを見抜いておられるイエスが、神の言葉を神に変わって語ってくれる預言者だと気づいている。サマリアの女の口から「私はメシアが来られることを知っている」と告げられたイエスは、「あなたと話している私がそうである」と明かし、真の礼拝について告げた。エルサレムでもゲリジム山でもない、山に縛られることなく、いつでもどこでも礼拝する時が来る。私を信じよ。今がその礼拝のとき。神なる父があなたを求めておられる。霊である父を、霊と真理をもって礼拝しなければならない。礼拝を神と出会う道であるとして、礼拝の大変革を告げたのである。

サマリアの女は、時・場所の制限から解き放たれた、自由な礼拝の先頭に立っている幸せな女に変わった。水がめを置いたまま。水がめを置くというのは、これまでの生活から抜け出したということ。イエスのことを町の人に知らせに行く。村八分にされている女が、堂々と町へ入ってイエスを紹介。この変化に、すでに彼女の心から永遠のいのちに至る水が湧き出している。

問　私たちがしがみついている「ヤコブの井戸」は何か。

ファッション、ショッピング、グルメ・・・気晴らしでごまかしていないか。

人間の根源的渇きは人間やモノでは決して癒されない。

内から湧き出る水；イエスと出会って解放される。

　＊自分の心からいのちの泉があふれる体験があるか？

　　心に本当の喜びをもたらすものは何か？

　＊自分にとって霊と真実の道とはどのようなものか？どのような生き方があなたを生き生きさせるか？

詩編130 深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。

　　　 主よ、この声を聴きとってください。

嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください

[](http://www.artcolorstore.com/images/painting/Christ-And-The-Woman-Of-Samaria-Rembrandt-Harmenszoon-Van-Rijn-Oil-Painting-ACS01106.jpg)

詩編　42 「枯れた谷に鹿が水を求めるように

神よ、私の魂はあなたを求める。

神に、命の神に、私の魂は渇く。

いつ御前に出て、

神の御顔を仰ぐことができるのか。

昼も夜も、私の糧は涙ばかり。

人は絶え間なく言う

「お前の神はどこにいる」と。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　レンブラント「サマリアの女」